

## 広報誌「えいらい」50号記念座談会

令和3年11月10日(水)、広報誌「えいらい」50号記念座談会が行われました。発行責任者の山本祐司理事長をはじめ、これまで「えいらい」の編集に携わったメンバーが集まり、創刊号から今までのバックナンバーを見ながら、当時の様子をインタビュー形式で語っていただきました。

聞き手：現広報委員 高須賀(高)、河野(河)  
語り手：山本理事長(理)、浅野事務長(事)  
土肥(土)、松下さん(松)



写真中央 山本祐司理事長、写真左手前より、浅野光孝事務長、総務課 河野桂治、放射線室 高須賀弘喜主任補、右手前より、総務課 土肥博子、総務課元職員 松下かおりさん

### ～創刊当初について～

- 高：院内広報誌から院外広報誌へ変更したきっかけやその当時の様子を教えてください。
- 理：私(現理事長)が院長就任とともに、院内誌から院外誌に変更しました。それまでは院内誌を発行していました。漢字で書くとよく「永瀬(ながせ)と勘違いされがちなので、あえて平仮名で「えいらい」にしました。「永頼(えいらい)」は書経、大禹謨(だいうぼう)にある「萬世永頼」を出典としており、永遠の信頼という意味です。
- 河：創刊号の編集メンバーはどうでしたか？
- 松：院内報の延長のような感じでした。もともと編集ソフトが使えたので、病院で購入してもらい、経費削減のため印刷以外はすべて、実質一人でやりました(笑)。院内図書室に他院の広報誌の情報が入ってきていたので、たくさん読んで参考にしました。
- 理：今もその流れで印刷以外は職員の手作りですね。
- 事：世の中でホームページなどが整い始めた時代で、逆に紙媒体が敬遠されつつありました。でもやはり、紙媒体で発行する。そういう文化も必要だと考えました。なんだかんだ、ほかの病院も紙媒体での院外誌は続いていますよね。

### ～編集の思い出～

- 松：医局の先生方に普段から接することも多かったのですが、たわいもない会話の中で、いつも記事になることを探っていたように思います。趣味に関する連載や巻頭写真など、原稿依頼の際には先生方には大変ご協力いただきました。また、忙しい現場や院内の勉強会などにカメラ片手に取材に伺うわけですが、プロのカメラマンではないので、写真撮影においては撮る側も撮られる側も、色々工夫が必要でした。最初のうちは、いざ撮影した写真を見返してみると、後ろ姿や後頭部がほとんどの遠慮気味な写真ばかりだったり(笑)。



- 土：写真にこだわりがある方もいらっしゃるの、色にも気を使いました。印刷すると最初はうまく写真の色が出なかったこともありました。
- 理：「臨床の現場から」は創刊号から続いています。最近は新しく来た先生に紹介も兼ねて順番に書いていただいています。多忙の中で記事や写真を提供してくださる職員には感謝しかありません。

### ～心に残る記事～

- 河：心に残った記事はありますか。
- 理：永頼会ができた当初におられた先輩方のお話を聞いた財団設立50周年(2014年No.20、21)のインタビューは心に残っています。自分のいなかった頃の永頼会の歴史が聞けて、とても嬉しかったです。
- 土：私は南棟を建て直した記事のレイアウトや写真に悩んだことが思い出深いです(2014年No.19、2015年No.24)。建て替え途中の写真を巻頭にしたり(2013年No.17)、工夫しました。財団設立50周年や病院創立60周年の記事(2016年No.29)も心に残っています。病院の敷地の変遷を知るために、図書館に行き、古い地図を調べました。創立当初の写真を探して、スキャンして、写っている方々を調べて…貴重な体験でした。
- 高：事務長はいかがですか。
- 事：やはり財団設立50周年の香川元事務長のインタビュー(2014年No.20)ですね。先代の思いや時代の流れがわかって感慨深いというか…励みになりました。



### ～最後に～

- 高：最後に今後「えいらい」にどうなってほしいですか。
- 松：たくさんの人に見ていただきたいです。特に、医療に携わってない方の目に触れるにはどうすればいいかがずっと課題だったので、ぜひ克服して欲しいです。広報誌「えいらい」を通して松山市民病院の多くの側面を知っていただきたいです。
- 高：そのような広報誌になれるように、これからも頑張りたいと思います。

歴史ある広報誌「えいらい」の発行に至る経緯や思い入れなどが知れて大変勉強になった座談会でした。編集者が一丸となり、苦勞を惜しまず作品を作り上げる姿勢は、現広報委員である我々も、学び受け継がなければならないと感じました。お忙しい中貴重なお時間をいただき、ありがとうございました。(広報委員 高須賀、河野)